2017 年度④

史跡古津八幡山　弥生の丘展示館　平成 29 年度企画展４

邪馬台国の時代５

柏崎・上越・頸城の世界

解説パンフレット

会期　2018 年１月４日～3月 25 日

企画展の開催にあたって

本企画展は、2015 年度に開催した「邪馬台国の時代１　北陸と会津を結んだ古津八幡山－東北南部（会津）の世界－」、「邪馬台国の時代２　縄文のある弥生土器－新潟北部（阿賀北）の世界－」、2016 年度に開催した「邪馬台国の時代３　古津八幡山の頃の信濃川右岸の世界」、「邪馬台国の時代４　古津八幡山の頃の信濃川左岸の世界－六地山遺跡里帰り展－」に続く第５回目となります。

今回の企画展は、本県では水稲稲作の先進地域にあたる柏崎・上越・頸城地域を対象にして、弥生時代中期後半から古墳時代早期までの遺跡動向や生業などを見て、これまでの地域と同じような弥生時代中期と後期の間に大きな画期・断絶が認められるのかということを、まずは明らかにしたいと考えました。

また、この地域では弥生時代中期末は北陸系・長野系土器で構成されるのに対し、後期にはほぼ北陸系土器に統一されると考えられています。そのような中で高地性集落・環濠集落が造られるようになるという柏崎・上越・頸城地域の状況と比較すれば、古津八幡山遺跡の高地性環濠集落の成立における社会背景の参考になるのではないかとも考えて企画したものです。

－柏崎平野の弥生時代の遺跡－

柏崎平野は、旧西山町と出雲崎町の境に源流をもつ別山川が南流し、鯖石川と合流し日本海にそそぐ南北 15km、東西３～４km 程の平野で、日本海側には海岸段丘・砂丘、東側は丘陵・台地に遮られている。別山川流域には湿潤な沖積地が広がっており、弥生時代の遺跡が多数見つかっている県内でも有数の地域である。

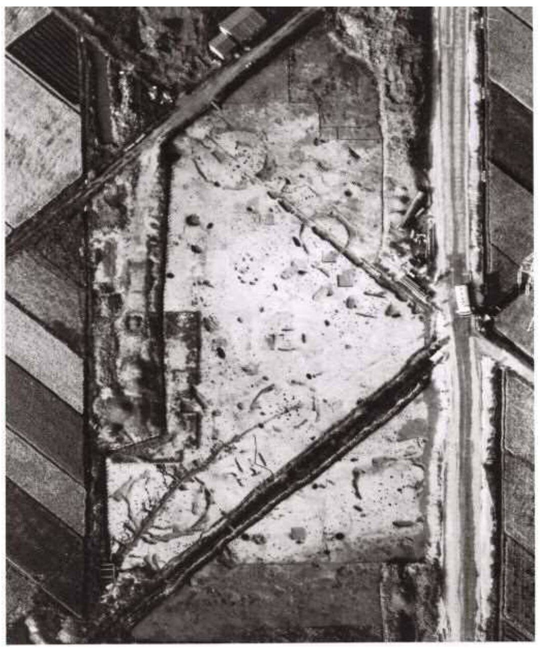
弥生時代中期、水稲農耕文化を携えた北陸系集団によって集落が営まれる。別山川左岸の下谷地遺跡・萱場遺跡、海岸砂丘上の小丸山遺跡などである。中期には長野系や会津系土器も一定量伴うが後期になると北陸系に一本化される。分水嶺を挟んで北流する島崎川流域の様相に近い。後期初頭が不明だが、後半になると下谷地遺跡は東側の丘陵近くの扇状地にある戸口遺跡に移動し、３km ほど北には西谷遺跡を中心とした集団が出現する。別山川右岸の西岩野遺跡は日本海に近く、北部九州系土器が採取された開運橋遺跡ともども、海運に関係する拠点集落だった可能性があろう。

柏崎平野では５遺跡（野崎遺跡・西谷遺跡・西岩野遺跡・萱場遺跡・田塚山遺跡）で後期の環濠が確認されており、順調に成熟していった弥生社会の様子が窺える。

国史跡　下谷地遺跡　　　柏崎市吉井字北沖ほか

遺跡は JR 越後線荒浜駅より２km ほど南東に位置し、別山川左岸の西山丘陵と曽地丘陵に挟まれた標高５m の沖積地に立地する。本発掘調査は、北陸自動車道の建設に伴い新潟県教育員会によって 1977・1978 年に行われた。弥生時代中期後半の典型的な集落遺跡として 1979 年に国史跡に指定され、遺物も 2011 年に県指定文化財となっている。

調査地点は周囲に比べ標高が高く、平地式住居６棟、掘立柱建物 13 棟、方形周溝墓４基のほか土坑などの遺構が見つかった。居住域と墓域が明確に分かれないことが特徴である。



平地式住居（周溝をもつ建物５棟）は、数基の柱穴がほぼ円形に配列し、その外側を部分的に途切れる周溝が巡る。周溝の規模は内側で直径 11～14m、幅は 0.6～２m である。周溝は住居内部の水位を下げることを目的に構築されたものと考えられる。

方形周溝墓はいずれも溝の四隅が途切れる形態で、規模は溝の内側で長軸が 5.6～７m を測る。４基のうち２基で主体部の痕跡が確認されている。

161 基確認された土坑は、墓と思われる土坑や玉作関連の工作用として機能した土坑、梯子が検出され貯蔵穴として使用されていた土坑など様々なものがある。

遺物は弥生土器・石器のほかに玉作関係資料や木製農具、炭化米などがある。弥生土器は中期後半の北陸系（小松式）が９割を占め、長野系（栗林式）は１割に満たない。北陸系は標識遺跡である小松市八日市地方遺跡の８期～９期頃に相当し、３期に細分されている。新しくなると装飾文様の簡素化が進む。長野系は赤彩磨研土器が見られないことから、栗林Ⅰ式が主体と考えられる。この他に後期の東北系（天王山式）が１点ある。

石器は、石鏃 214、石錐 53、石匙１、掻器類 18、両極石器 155、磨製石斧１、砥石 12、磨石 12、石庖丁類 13 点などがある。磨製石斧が極端に少ないが、上越市の吹上遺跡などの事例から鉄器化が進んでいたと考えることは難しく、ほかの理由であろう。

玉作関係資料は管玉の原石から完成品までの作業工程がわかる資料が出土しており、詳細な玉作工程が復元されている。石材は鉄石英もあるが、緑色凝灰岩が主体を占める。

炭化米・石庖丁・木製平鍬などが見つかっており、周辺の低湿地で水稲耕作を行っていたものと推察される。北陸系（小松式）集団が、日本海沿いに小松式土器・周溝をもつ建物などと共に稲作農耕文化を伝えたものと考えられる。石庖丁は大形直縁刃石器と言われるもので、使用痕研究からイネ科植物の根刈具と推定されている。

萱場遺跡（野附・萱場遺跡）　　柏崎市吉井字萱場

遺跡は JR 越後線荒浜駅より 2.5km ほど南東にあり、国史跡の下谷地遺跡の約 200m 東側に位置する。別山川左岸の沖積地にある微高地上に立地し、標高は５～６m を測る。本発掘調査は、県営土地改良総合整備事業に伴い柏崎市教育委員会によって 1982・1987 年に行われた。

中期後半の遺構は、周溝墓の周溝部の可能性のある溝が５条、墓と考えられる土坑が２基、墓に伴う割木を敷き詰めた性格不明遺構がある。後期後半の遺構については確認面で幅が４ｍ前後を測ると推定された大溝（SD７）がある。なお、２回の調査による土層図の検討から、SD７とほぼ直行する濠状の溝とその外側に土塁状の堆積層が確認された。この濠状の溝と土塁の存在から弥生時代後期には環濠があった可能性が指摘されている。

遺物は土器のほか、少量ながら石鏃などの石器、碧玉製管玉の素材や未成品といった玉作関連資料が出土している。土器は中期後半の段階では、北陸系（小松式）・東北南部系（川原町口式）が主体になる場所が地点を違えているようだ。後期後半になると北陸系土器が大半を占めるようになる。

小丸山遺跡　　柏崎市青山町字小丸山

遺跡は下谷地遺跡の北西約 3.5 kmに位置し、荒浜砂丘と呼ばれる海岸砂丘上に立地する。なお、海岸線からは 250ｍの位置にある。傾斜地となっており、標高は 10〜16ｍを測る。本発掘調査は東京電力新潟原子力発電所建設に伴い柏崎市教育委員会によって 1983 年に行われた。縄文・弥生・古墳時代、古代の遺構・遺物が確認されている。

弥生時代の遺構はⅢ層上面から、長軸２〜2.5ｍとなる楕円形の焼土遺構３基と、自然地形のくぼみ縁辺部で確認された炭化物の分布域が見つかった。

中期後半の弥生土器は、北陸系（小松式・小松式系）が９割以上を占め、長野系（栗林式）は１割に満たない。遺構一括資料ではないが、くぼ地から出土した資料はⅡｃ層とⅢ層上面に分離される良好な一括資料とされ、長野系はそれぞれ栗林Ⅰ式・Ⅱ式土器に併行すると考えられている。この他に石鏃・石斧などの石器や、少量ながら管玉製作に関する玉作関係遺物が出土している。また、Ⅱｂ層からは後期の北陸系土器も出土している。

中期の土器群の古相・新相は、下谷地遺跡とほぼ同時期に存続した遺跡であることを示している。

戸口遺跡　　柏崎市吉井字戸口ほか

遺跡は JR 越後線荒浜駅より３kmほど南東に位置し、標高は７〜９ｍを測る。別山川左岸の沖積地に立地し、東側は曽地丘陵に近く、西には萱場遺跡・下谷地遺跡が近接する。本発掘調査は、県営土地改良総合整備事業に伴い柏崎市教育委員会によって 1988 年に行われた。幅３ｍに満たないトレンチ状の調査区であったが、弥生時代から近世までの遺構・遺物が確認された。

弥生時代の遺構は溝１条（SD67）のみで、調査区が狭いために全容は不明であるが、「く」の字状に曲がる部分が検出されている。溝の幅は 1.2〜２ｍ、深さは 0.2ｍで、方形に巡る可能性があることから周溝墓との想定もされている。遺物は SD67 およびその周辺と、包含層から後期後半の良好な土器が一括して出土した。北陸系土器（法仏式）が大半であるが、包含層一括資料が SD67 出土資料よりもやや古い様相を示すと考えられている。

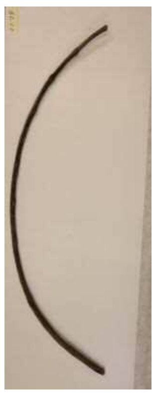
下谷地遺跡・萱場遺跡などと共に別山川左岸にある弥生時代から古墳時代の遺跡の一つとして、遺跡動態が考察されており、弥生時代中期から後期後半になると、別山川近くの沖積地上から丘陵際の扇状地上へ集落が移動することがわかってきている。

西谷遺跡・刈羽貝塚　　刈羽郡刈羽村西谷字源土ほか

遺跡は JR 越後線刈羽駅より 1.7km ほど南東に位置する。別山川左岸にある標高約 16ｍの手崎丘陵とその裾部周辺（標高約 6.5ｍ）に立地する。発掘調査は、1990・1991 年に前谷地川改修工事及び県営圃場整備に伴い、また 1997 年には源土運動広場整備工事に伴い、いずれも刈羽村教育委員会によって行われた。調査の結果、縄文時代から近世までの遺構・遺物が確認された。なお、1952 年に八幡一郎によって丘陵上で発掘調査が行われ、刈羽貝塚と命名された遺跡も同一の遺跡と考えられている。

弥生時代の遺構として、環濠１条、水路１基、水田が上下で２面とそれに関係する木道状遺構や足跡などがあり、弥生時代後期から古墳時代早期の遺物が出土している。環濠は丘陵端部の南東の調査区で見つかった。確認された長さは約 4.5ｍと部分的で、規模は確認面で上幅 0.4〜0.9ｍ、深さ 0.6〜0.8ｍ、断面形はＶ字状を呈する。水田や水路が丘陵下の湿地帯で検出されており、丘陵上に推定されている居住域と丘陵下の生産域が共に確認されている遺跡と評価することができる。

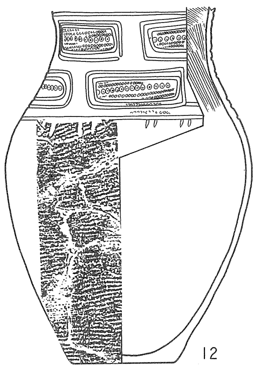
出土遺物には、土器のほかに土製品、木製品、鉄製品、石器・石製品、玉作関連遺物などがある。土器は弥生時代後期から古墳時代早期まであるが全時期を通じて北陸系が主体で、東北系・長野系が若干認められる。特に、後期後半の北陸系土器（法仏式）が多い。木製品には田下駄・広鍬未成品や杓子・弓や丸木舟の先端部などがある。鉄製品は１点のみ環濠覆土から出土している。また、管玉の製作工程を示す資料も見つかっている。



西谷遺跡は居住域の様相が不明であるが、環濠の内側に住居を構え、玉作を行い、鉄製品を受用し、また丘陵下の湿地では水稲耕作を行っていた拠点集落と言える。木製農具の未成品もあるので、木製品の製作も行っていたものと考えられる。

西谷遺跡は、柏崎平野の北端近くの別山川左岸にある拠点集落の一つであるが、本遺跡の３km 程南には中期後半の下谷地遺跡・萱場遺跡や本遺跡とほぼ同時期の吉井遺跡群がある。

図示した土器は、本遺跡から採集された東北系小形壺。口縁部を欠き、現存高 15cm 程。天王山式を特徴づける交互刺突文が円形刺突列や刻み目に退化し、体部には LR 縄文が横位に施文される。後期後半に、北陸系集落に持ち込まれた数少ない異系統土器の一つとして重要。



西岩野遺跡　　柏崎市長崎字岩野ほか

遺跡はJR越後線西中通駅より 0.8km ほど北東に位置する。別山川右岸の荒浜砂丘から東にのびる舌状の中位段丘上に立地する。標高は 25～30m、周辺の沖積地とは 20～25mの比高差を測る。本発掘調査は県道改良事業に伴い柏崎市教育委員会によって 1986 年行われた。厚いところで２m以上もの砂丘砂に覆われていたが、縄文時代から近世までの遺構・遺物が確認され、中でも弥生時代後期の遺構・遺物がまとまって見つかった。

弥生時代の遺構は、大溝と近接して残存不良の住居跡、土坑などがあった。大溝（SD57）は幅 4.64m、深さ 1.54m程で断面形は半円状を呈する。出土遺物は少ないが、弥生時代後期後半の遺構で、以前より調査担当者によって集落を取り囲む環濠の可能性が指摘されていた。周辺から出土した土器は北陸系の後期後半（法仏式）がまとまっている。

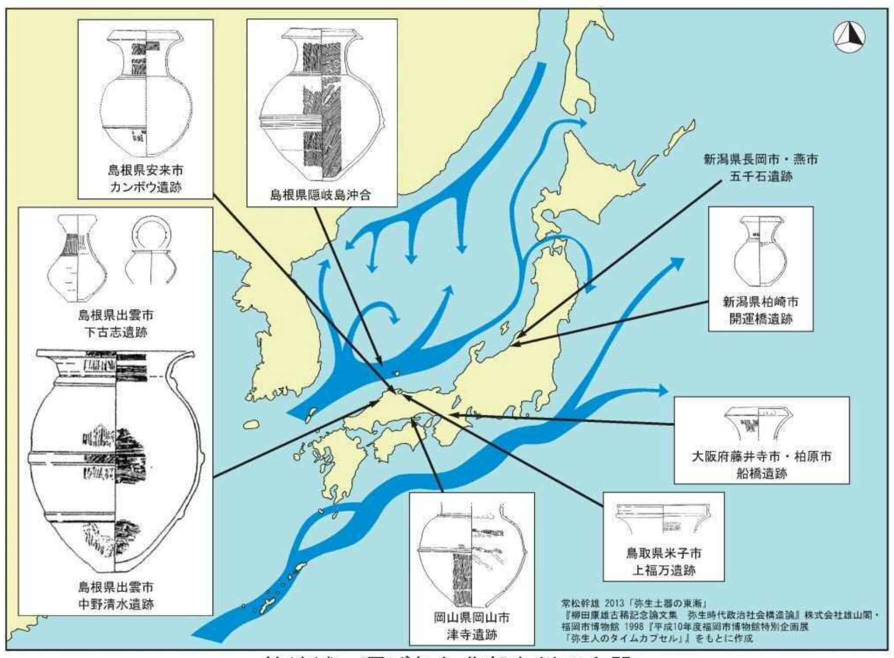
2017 年調査の概要　1986 年調査区の 300m程西方に位置する。環濠とその外側（西側）の墓域。弥生時代後期後半から古墳時代早期の方形周溝墓４基、土坑墓６基、円形周溝状遺構２基、大形掘立柱建物１棟、勾玉・管玉・ガラス小玉などの豊富な副葬品や長野系土器が確認された。広域な物資の流通が窺える極めて重要な発見。

開運橋遺跡　　柏崎市橋場町字川向新田

遺跡はJR越後線西中通駅より１km ほど西にあり、鯖石川河口から上流２km ほどの河岸に位置する。標高は０mである。1955 年に鯖石川の改修工事による開運橋の掛け替え工事の際に川底から弥生時代の壺・蓋、平安時代の須恵器などが採集された。

弥生土器の壺は、ほぼ完形品で器高 21.2cm、口径は 12.5cm と大きく、袋状口縁で下部に明瞭な稜を持ち、頸部と体部の境に突帯が巡り、底部が凸レンズ状となるのが特徴。北部九州の弥生時代後期前半の下大隈（しもおおくま）式土器の壺の特徴と一致する。砂粒を多く含む土で作られていることも特徴の一つで、器形・材料ともに県内での模倣品とは考えられないことから、北部九州から運ばれた弥生土器と考えられている。

下大隈式の壺は島根県隠岐島沖合からも引き揚げられており、弥生時代後期の人々が日本海を行き来していたことを示す資料としても貴重である。なお、本遺跡から 1.5km 程北東にある西岩野遺跡から重要な発見が報告されているが、本資料は日本海、鯖石川・別山川を介した他地域との交流を推測させるものである。



他地域へ運ばれた北部九州の土器

野崎遺跡　　柏崎市西山町五日市字箕輪・行念ほか

遺跡はJR越後線西山駅から南に約１km に位置する。柏崎平野の北端近くにあり、別山川左岸の沖積地にある中位段丘上に立地する。標高は約 35mを測り、周囲の低地との比高は 23mほどである。遺跡は大池の北側にある丘陵上に広がっている。

本発掘調査は、旧西山町教育委員会によって町道五日市大池線改良工事に伴い 1993 年に行われている。この 1993 年の調査では縄文時代の遺物が多く出土しているが、調査以前から縄文時代から平安時代までの遺物が採集されている。この採集遺物のなかには弥生時代後期の土器が確認されている。

また、その後の確認調査で弥生時代の溝が見つかっている。正式報告がないために詳細は不明だが、溝は断面Ｖ字状で深さが２m近くもあり、中からは弥生時代後期の土器が出土しているという。溝の深さや形状、出土遺物から弥生時代後期に集落の防禦を目的として造られた環濠の可能性が高いと考えられている。

亀ノ倉遺跡　　柏崎市大字南条字熊通

遺跡はJR信越本線北条駅より 0.8km ほど南に位置する。鯖石川と長鳥川との合流点近く、鯖石川の河岸段丘上に立地し、標高は 20m前後を測る。本発掘調査は、県営経営体育成基盤事業に伴い柏崎市教育委員会によって 2008 年に行われた。調査の結果、弥生時代・古墳時代から近世までの遺構・遺物が確認された。

調査区は幅３m以下と狭いながらも、古墳時代早・前期の遺構として、掘立柱建物３棟のほか溝や土坑などが見つかった。３棟の掘立柱建物は溝に区画された内側に存在することから、溝に囲まれた集落と考えられている。

弥生時代後期の東北系土器（天王山式系）・石器と古墳時代早・前期の土師器が共に出土している。東北系土器は破片数で 40 点ほどであり、大半は古墳時代の土師器である。石器には石鏃未製品や、剥片などがあることから、小規模ではあるが石器製作が行われていたと考えられている。両者が伴ったと報告されているが、時代・系統を異にする土器群である。現状では両者が共伴しない遺跡が 99% 以上であり、従来の編年感では共伴したと断定することは難しいと言わざるを得ない。

－高田平野・妙高山麓の弥生時代の遺跡－

●鉄器　新潟県内で弥生時代の鉄器が最も多く出土している地域。裏山遺跡の 11 点は一遺跡では最多出土。中期の遺跡からは現状では見つかっていない。

- ○裏山遺跡　方形鍬鋤先６、鉄鏃３、鉇１など計 11 点
- ○下馬場遺跡　鉄鏃１、針状鉄製品１など計６点
- ○上ノ平・矢代山遺跡　刀子１・不明４、土坑墓から副葬品鉄鏃２点など

●東北・北海道系遺物　高田平野は中期・後期ともに会津系（川原町口式）・秋田系（宇津ノ台式）、東北系（天王山式）は希少。一遺跡数点に限られる。大洞原Ｃ遺跡・子安遺跡の折衷土器は長野との関係上重要。後期前半期の魚沼→長野→上越ルートを示すもの？

- ○吹上遺跡　川原町口式・宇津ノ台式、アメリカ式石鏃
- ○大洞原Ｃ遺跡　天王山式と吉田式の折衷
- ○子安遺跡　天王山式系と吉田式の折衷？　北陸系（法仏式）が主体の遺跡
- ○下馬場遺跡　続縄文式・黒曜石製岩偶

○釜蓋遺跡・今泉釜蓋遺跡・小野沢西遺跡　天王山式系　小野沢西遺跡は中期から後期にかけて長野系（栗林式・吉田式・箱清水式）主体の遺跡で、そこに東北系土器が入る。

裏山遺跡　上越市岩木字裏山ほか

遺跡はえちごトキめき鉄道春日山駅より 2.2km ほど南西に位置し、高田平野西側の丘陵上に立地する。海岸までは直線距離で約３km。標高は最高点で 92m、周辺との比高は約 70m を測る。本発掘調査は上信越自動車道上越ジャンクション建設に伴い新潟県教育委員会によって 1995～1997 年に行われた。丘陵頂部の約東西 80m、南北 30m、面積 2,200 ㎡程の緩斜面で弥生時代後期の高地性環濠集落が見つかった。

弥生時代の遺構は、竪穴住居８棟、土坑 12 基などが丘陵頂部の北側を中心に検出され、北・東・南側の丘陵急斜面からは環濠３条が確認された。竪穴住居は平面形が隅丸方形で４本主柱穴、隅丸長方形で柱穴の無いものなど違いがみられる。環濠は総延長約 193m で、深さは 0.6m前後から２m であったが､段切りによる掘削のため断面形はＬ字状となる。

遺物は土器のほかに鉄製品や､磨製石斧・環状石斧・石鏃・砥石などの石器、勾玉・管玉の玉作関連資料などがある。土器は北陸系（法仏式後半）を主体に、信州系・近江系が少量見られる。方形鍬鋤先６点、鉄鏃３点など 11 点もの鉄製品や多量の砥石の出土量は北陸でも際立って多く、方形鍬鋤先は朝鮮半島の伽耶地方からの渡来品と考えられる。なお、出土遺物については 2012 年に県指定文化財となっている。

下馬場遺跡　上越市下馬場字浦山ほか

遺跡は JR 北陸新幹線上越妙高駅より 2.3km ほど南西に位置する。高田平野西側の丘陵からのびる台地上の標高 70～78m に立地する。沖積面との比高は約 40m。本発掘調査は上信越自動車道建設に伴い新潟県教育委員会によって 1997 年に行われた。調査の結果、弥生時代後期後半の高地性集落であることがわかった。環濠は確認されていない。

竪穴住居 14 棟、土坑 16 基などの遺構が見つかった。竪穴住居の構造は、隅丸方形で４基の柱穴、隅丸長方形で２基の柱穴、円形で環状の柱穴など様々なものが見られた。

遺物は弥生土器・玉作関連資料・鉄製品などがある。土器は北陸系（法仏式）が主体。続縄文式土器（後北Ｃ１式～Ｃ２・Ｄ式）が数点あり、黒曜石製の石偶と共に北海道や東北北部など北方との交流を窺わせる。玉作関連資料は鉄石英と緑色凝灰岩の管玉製作工程品（鉄石英が９割以上）や、玉の穿孔に使用された可能性のある針状鉄製品が出土している。また、鉄鏃・板状鉄製品などの鉄製品や有溝砥石、さらには複数の焼土面をもつ竪穴住居の存在から、集落内で金属加工を行っていた可能性も考えられている。なお、炭化米も出土していることから周辺で稲作を行っていたことが想定される。

国史跡　斐太遺跡　妙高市宮内・雪森・神宮寺ほか

遺跡はえちごトキめき鉄道北新井駅より２km ほど西に位置し、高田平野西側の丘陵の低丘陵の先端部に立地する。標高 80m前後を中心に、約 60～145mにかけて広がり、周辺の沖積面との比高差は 40mを超える。遺跡は、南北 800m程の丘陵上に谷や環濠によって区画された**百両山、上ノ平、矢代山Ａ・Ｂ・Ｃ地区**の５つの居住域に分かれる。居住域の面積が 50,000 ㎡以上の東日本最大規模の高地性環濠集落である。

発掘調査は 1926 年に行われ、1955 年からは東京大学が４年間調査を行った。この調査により防御目的の高地性環濠集落と評価され、1977 年には国史跡となった。その後、2001～2003 年には旧新井市教育委員会により確認調査が行われ、2005 年には矢代山Ｂ地区が国史跡の追加指定を受けた。調査面積比率が少なく全容把握が難しい。

確認された遺構は竪穴住居・環濠・土坑墓・溝などである。各地区で環濠による区画の仕方が異なる。百両山地区では丘陵両長辺、上ノ平地区は居住区を取り囲むように、矢代山Ａ・Ｂ地区は東側だけに環濠を構築する。矢代山Ｂ地区では二重環濠が確認されたが、外環濠→内環濠の時期差があるので当初から二重環濠ではなかったと考えられる。断面形はいずれもＶ字状で、規模は内環濠が幅約 6.2m、深さ約２m、外環濠が幅約 3.8m、深さ約 1.5mである。

竪穴住居は窪みとして今でも残り、その痕跡は 130 か所を超えている。これに完全に埋没しているとみられる遺構を含めると 200 か所以上と想定されている。発掘調査された竪穴住居は９棟で、全容が判明しているものを見ると、平面形は隅丸方形を呈するが内部構造は４基の柱穴、２基の柱穴、柱穴の無いものと様々である。

土坑墓は矢代山Ｂ地区で３基あり、長軸約２m、短軸約１m の長方形である。２基からは鉄鏃が１点ずつ出土した。９号土坑からは長野系（箱清水式）の壺が出土した。また、矢代山Ｃ地区で土坑墓群や墳丘墓が確認されている。

遺物は土器のほかに鉄製品・石製品・ヒスイ製勾玉未完成品などがある。土器は後期後半から終末の北陸系（法仏式後半・月影式）を主体とし、長野系（箱清水式）・東海系など外来系も一定量出土している。東北系は確認されていない。主要時期が釜蓋遺跡空白期にあたるので、釜蓋遺跡を含めた遺跡の消長を考える必要がある。鉄製品は土坑墓出土の鉄鏃など少ないが、鉄器用の砥石・軽石製品があり、鉄器化が進んでいたことがわかる。

矢代山墳丘墓群－斐太遺跡の墓域

妙高市宮内字矢代山に所在する。斐太遺跡矢代山Ｂ地区の西側の背後 110～140mの丘陵上の尾根部に立地する。発掘調査は保存目的のため妙高市教育委員会等によって 2003～2005 年に行われた。墳丘墓あるいは古墳の可能性をもつ候補地は 20 か所以上と考えられている。

最高所に築かれたＡ２号墳丘墓は墳丘が削平されていたが、区画溝の位置から規模は南北長 18～20m、東西長 14～17mほどで平面形は台形状となる。

標高の下った地点にあるＣ６号墳丘墓は東西長が推定 5.5m、平面形は不整形な三日月形に近い。Ｃ６号墳丘墓の墳頂部では４基の墓坑が検出されている。なお、Ｃ６号墳丘墓の近くの尾根上には竪穴住居２棟、尾根を巻くように環濠も確認されているので、墳丘墓だけではなく、高地性集落としての分布域でもあったものと推測される。

墳丘墓の築造された時期は出土した土器から、弥生時代後期後半から終末期で集落とほぼ同時期と考えられる。また、Ａ２号墳丘墓はこの時期の新潟県内における墳丘墓（台状墓）では最大規模である。

国史跡　吹上遺跡　　上越市大字稲荷字吹上ほか

遺跡は JR 北陸新幹線上越妙高駅より 1.5km ほど南西に位置する。青田川扇状地の先端部にある河岸段丘上に立地し、標高は約 25mを測る。本発掘調査は主要地方道上越新井線整備事業に伴い上越市教育委員会によって行われ、弥生時代中期から古墳時代前期の遺構などが多数見つかった。遺構・遺物の詳細な研究がなされ、基準資料となっている。

弥生時代の遺構・遺物の変遷の詳細は別表に記したので、概要を記す。

吹上遺跡における
弥生時代の細別時期と遺構などの動向

吹上集落期		土器型式	土器群の比率	玉作り	建物など	墓	その他
Ⅰ期	中期中葉	古　八日市地方7期 中　八日市地方8期古 新　八日市地方8期新 栗林Ⅰ式	北陸系8：長野系2弱：その他 北陸南西部以西の影響	玉作り工房群7基（管玉5基、勾玉2基） 玉作り関連土坑	竪穴住居1棟 平地式建物2棟 掘立柱建物3棟 土坑群（廃棄土坑）	方形周溝墓1基 土坑墓1基	溝 （環濠）1条
空白期		磯部式 栗林Ⅱ式古段階					
Ⅱ期	中期後半～末	古　専光寺式 新　戸水B式 栗林Ⅱ式新段階	北陸系3：長野系7 東北系が加わる	玉作りが急速に衰退 玉作り工房2基	竪穴住居2棟 平地式建物1棟 掘立柱建物5棟 土坑	1辺10mを超える大形方形周溝墓4基 土坑墓1基	
Ⅲ期 Ⅳ期	後期前半～終末		北陸系10	玉作りは全く行われない	居住域は調査区外へ移動 掘立柱建物1棟	尾根に沿って方形周溝墓が築かれる 方形周溝墓6基 中期方形周溝墓上層2基（祭祀遺構？） 土坑墓3基	

土器構成比率は、中期中葉は北陸系８割：長野系２割弱、その他西方、中期後半になると北陸系３割弱：長野系７割と比率が逆転する。そして、後期はほぼ全て北陸系となる。

この土器構成比率を勘案して、遺構・遺物の変遷を考えると、中期中葉に北陸系集団が農耕技術を携えて移住し、環濠を掘削、玉作を盛んに行った。西方の遠隔地との交流も行っていた。中期後半は玉作りが衰退し、大形方形周溝墓が築かれ主に墓域へと変化した。長野系集団の活動の活発化によるもので、石庖丁・太形蛤刃石斧・銅鐸形土製品・銅鐸形石製品・銅矛形土製品などもそれらの交流によるものであろう。後期になると長野系集団が撤退し、近接する北陸系集団による墓域へと変化したと思われる。なお、出土遺物は 2015 年に県指定文化財となっている。

国史跡　釜蓋遺跡　　上越市大和５丁目ほか

遺跡は JR 北陸新幹線上越妙高駅より 0.4km ほど西に位置する。青田川扇状地末端の沖積地上に立地し、標高約 19m測る。2005 年から上越市教育委員会による試掘・確認調査で弥生時代後期・古墳時代初頭の大規模環濠集落であることが判明した。

環濠掘削以前と以後で空白期間があり、その空白期間が斐太遺跡の環濠と同じであることから、吹上・釜蓋（環濠掘削以前）→斐太→釜蓋（環濠掘削）と人々の移動が想定されている。

環濠は３条あり、１号環濠が古く２号環濠が新しい。東側は自然流路と結合して集落全体を区画する。また、南西側には張り出し区画溝があり、凸字状の方形区画を造り出している。濠の断面形は台形状（1 号・張り出し区画溝）、断面半円状（２号）、規模は幅３～5.5m、深さ 1.2～2.2mである。環濠内には 40,000 ㎡以上の居住区があった可能性がある。遺構には、竪穴住居や掘立柱建物、平地式建物の可能性のある遺構や土坑墓などがある。

遺物は土器以外に勾玉などの玉作関係資料や、建築部材・槽・鋤鍬柄の木製品、フイゴの羽口などがあり、当該期の生活を知る貴重な有機質遺物となっている。土器は北陸系を主とし、近江系・長野系・東北系がわずかに認められる。

今泉釜蓋遺跡－釜蓋遺跡の墓域　　上越市大字今泉字釜フタほか

遺跡は JR 北陸新幹線上越妙高駅より 0.4km ほど南西に位置する。青田川扇状地に立地し、標高は約 20mを測る。国史跡釜蓋遺跡の南方約 300m に位置している。本発掘調査は上越市新幹線新駅地区土地区画整理事業に伴い上越市教育委員会によって 2008 年に行われ、約 5000 ㎡の範囲に弥生時代後期から古墳時代前期の墓域が見つかった。国史跡釜蓋遺跡の墓域と考えられている。

方形周溝墓 17 基、土坑墓・溝などが確認されている。方形周溝墓には四隅が途切れるものと、溝が全周するものがある。主体部は

確認されなかった。周溝出土遺物から、釜蓋遺跡の環濠掘削以前と以後の２時期に分けられており、長期間墓域として機能していたことがわかる。溝が全周するものは後者。北陸系を主体とし、長野系・近江系や東北系など多系統の土器が見られることから、各地域から人々が集って墓前祭祀を行ったと推察される。

最大規模の４号方形周溝墓は四隅が途切れる周溝を持ち、規模は長軸9.2m・短軸8.9mである。土坑墓の可能性のある遺構（SX28）は、いびつな楕円形を呈し、長軸2.8m・短軸2.6mを測る。この遺構から長野系の壺が単独で出土している。

小野沢西遺跡　　妙高市関山字大峰・小野沢西ほか

遺跡はえちごトキめき鉄道関山駅より1.6kmほど南西に位置する。妙高山東麓の緩斜面地に立地し、標高は423～427mを測る。本発掘調査は上信越自動車道建設に伴い新潟県教育委員会によって1993～1995年に行われた。調査の結果、縄文時代から近世までの遺物が確認されたが、主体は弥生時代中期から古墳時代前期頃である。遺構は自然流路や溝、ピットが少量検出されているが、時期が確定できるものは少ない。

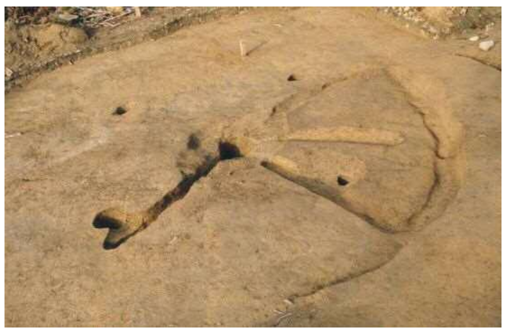
弥生時代中期後半から後期後半まで長野系土器が主体を占め、後期後半から北陸系が伴うようになり、古墳時代初頭になると北陸系が長野系に取って代わる状況が見られる。このことは、古墳時代前期に長野県北部で北陸系土器が大量に流入する状況に対応している。

妙高山麓にある小野沢西遺跡以外の籠峰遺跡、大洞原Ｃ遺跡などでも長野系土器が主体的で他系統よりも多い。このことは長野県境に近く、関川や北国街道沿いに立地する遺跡であることから長野との交流が盛んであったためと考えられる。また、小野沢西遺跡では東北系・東海系・畿内系などの遠隔地の土器も出土しているが、北国街道と飯山街道との合流地点からも近い交通の要衝に立地していることに関連する。

－糸魚川の弥生時代の遺跡－

後生山遺跡　　糸魚川市一の宮字後生山

遺跡はJR北陸新幹線糸魚川駅より0.9kmほど南東に位置し、姫川下流右岸の河岸段丘上に立地する。標高は42m前後で、沖積地との比高差は約30mを測る。本発掘調査は北陸自動車道工事用道路および市道蓮台寺線建設に伴い糸魚川市教育委員会によって1985年に行われ、その後の確認調査でも弥生時代の遺構・遺物が見つかっている。



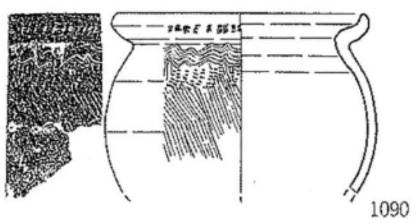
弥生時代の遺構には竪穴住居５棟、土坑や溝がある。竪穴住居は１辺４～６ｍの方形（２～５号住居）と直径６ｍの円形（１号住居）となるものがある。３号住居は攪乱を受け遺存状況は良くないが、ほぼ完形の弥生土器18点（甕６、壺１、鉢２、器台４、高杯５）がまとまって出土し、新潟県内における弥生時代後期中葉（猫橋式新・法仏式古）の基準資料となっている。１号住居は中央の土坑から放射状にのびる溝を持ち、この土坑周辺から管玉未成品や原石、砥石などの玉作関連資料が出土した。

遺物は土器、石器・石製品、玉作関連資料、刀子がある。土器は北陸系を主体に少量の近江系が見られる。玉作関連資料は緑色凝灰岩製管玉とヒスイ製勾玉の生産を示す資料である。遺跡立地などから玉生産を中心とした高地性集落と考えられる。

－金海会峴里貝塚出土の近江系弥生土器

大韓民国慶尚南道金海市－

遺跡は戦前から数次にわたって発掘調査が行われ、当時は金海貝塚と言われていたが、現在は会峴里貝塚・鳳凰台遺跡に分けられている。南東裾に位置する会峴里貝塚では、原三国時代（弥生時代中期後半～後期後半）になると住居が営まれるとともに貝塚が形成された。ここからは、前期後半から後期後半の弥生土器が見つかっている。金海周辺では北部九州系の倭系遺物が多数出土しているが、近江系の後期弥生土器の発見は重要である。北陸日本海側の弥生人が鉄を求めて直接、狗邪韓国（金海）に行っていたことを推測させる。



■『三国志』魏書東夷伝弁辰条

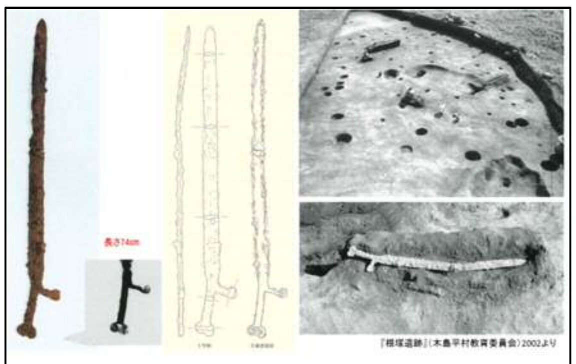
「国出鉄。韓濊倭皆従取之。諸市買皆用鉄。如中国用銭。又以供給二郡。」

「この国は鉄を産し、韓・濊・倭はそれぞれここから鉄を手にいれている。物の交易にはすべて鉄を用いて、ちょうど中国で銭を用いるようであり、またその鉄を楽浪と帯方の二郡にも供給している。」

－長野県木島平村根塚遺跡出土の「渦巻文装飾付鉄剣」－

根塚遺跡の「渦巻文装飾付鉄剣」は韓国金海市良洞里古墳で酷似した鉄剣が出土しており、加耶地方で作られたものと考えられています。

大陸から海運でもたらされ、高田平野を通って陸路で運ばれたと推測されます。その見返りは何だったのでしょうか。



渦巻文装飾付鉄剣（2号鉄剣　7号木棺墓）
長野県下高井郡木島平村　根塚遺跡（弥生時代後期後半）

蕨手装飾鉄剣（左から212号・212号・313号）
大韓民国金海市　良洞里古墳（2C後葉～3C中葉）

終わりに

柏崎平野や高田平野では、弥生時代中期から後期にかけて継続する遺跡が極めて少なく、県内の他地域同様に中期から後期にかけての断絶が見られました。地域によって多寡はありますが、中期までの北陸系・長野系から構成される土器様相は、後期になると妙高山麓を除くと、ほぼ北陸系に一本化されます。また、当該地

域の北方系・東北系の遺物にも注目しましたが、中期・後期ともに非常に少なく、かえって長野県北部や富山県の遺跡の方が多いような状況が確認できました。

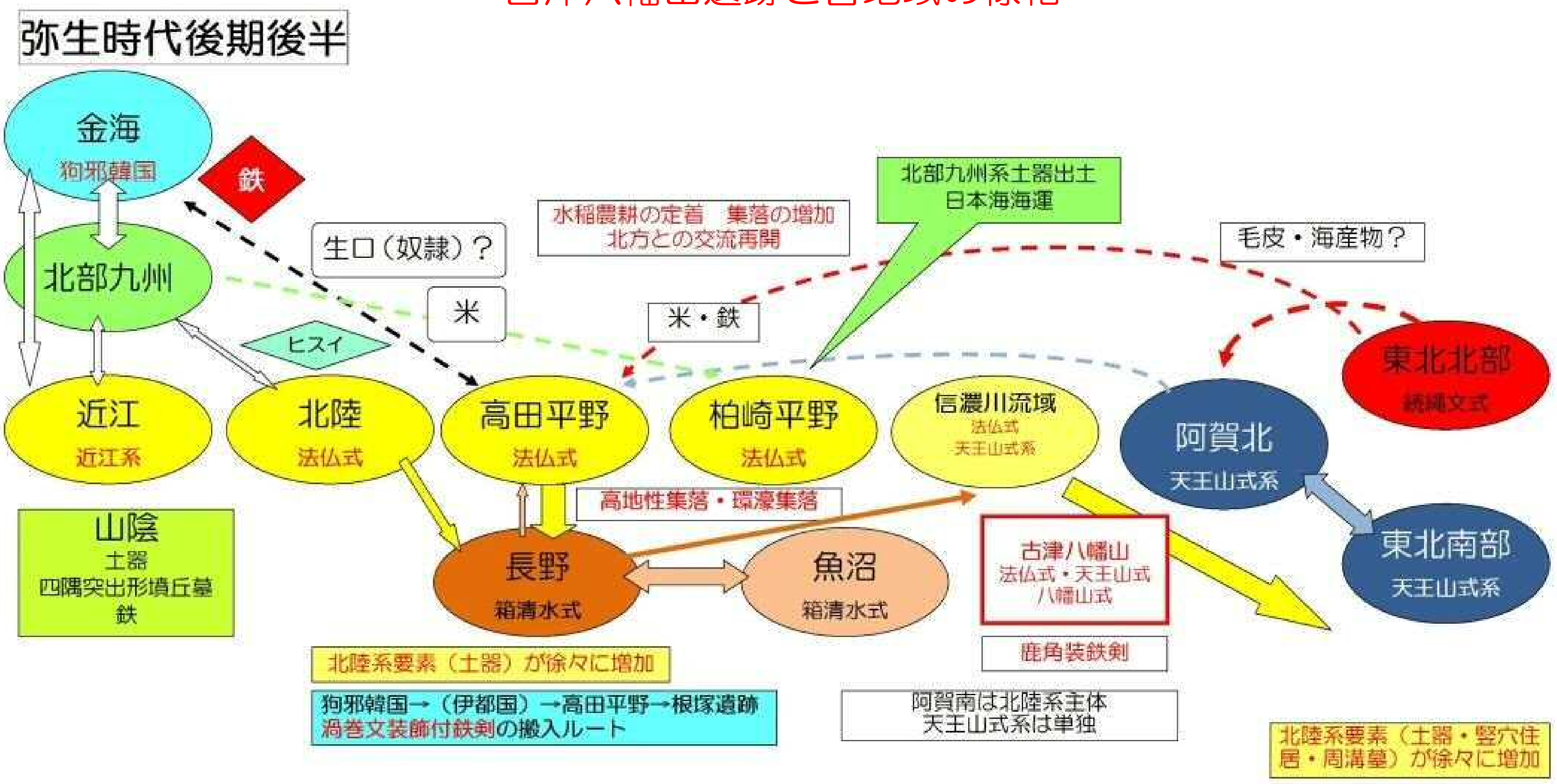
　また、遠方との交流については今回の企画展では十分に触れることができませんでしたが、大陸側との関係も含めて当時の人々の海運による鉄・碧玉製管玉・ヒスイ製勾玉や米・毛皮などの流通が鍵を握っているように思われます。

本企画展の開催にあたって、下記の機関等よりご協力いただきました。

糸魚川市教育委員会　柏崎市教育委員会
刈羽村教育委員会　上越市教育委員会　妙高市教育委員会
（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
齋藤瑞穂　笹澤正史　品田高志　三井田忠明

（五十音順、所属・敬称略）

古津八幡山遺跡と各地域の様相



摘要　高田平野・柏崎平野は断絶はあるものの、中期中葉の小松式土器に伴う稲作農耕文化の導入から後期終末にかけての発展経過がとらえられる県内唯一の地域である。内陸部（妙高山麓など）は除くが、中期から一貫して常に日本海を介して北陸系の文化要素が流入してきた地域性によるものと考えられる。碧玉製管玉やヒスイ・鉄の流通においても重要な役割を担っていた。

お知らせ

関連講演会　「石器から見た弥生時代の稲作農耕文化」

遺跡から見つかった石器の組成や使用痕分析などから弥生時代の稲作農耕文化についてご講演いただきます。

講　師：澤田　敦氏（（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団）

日　時：2018年2月11日（日）13：30～15：30

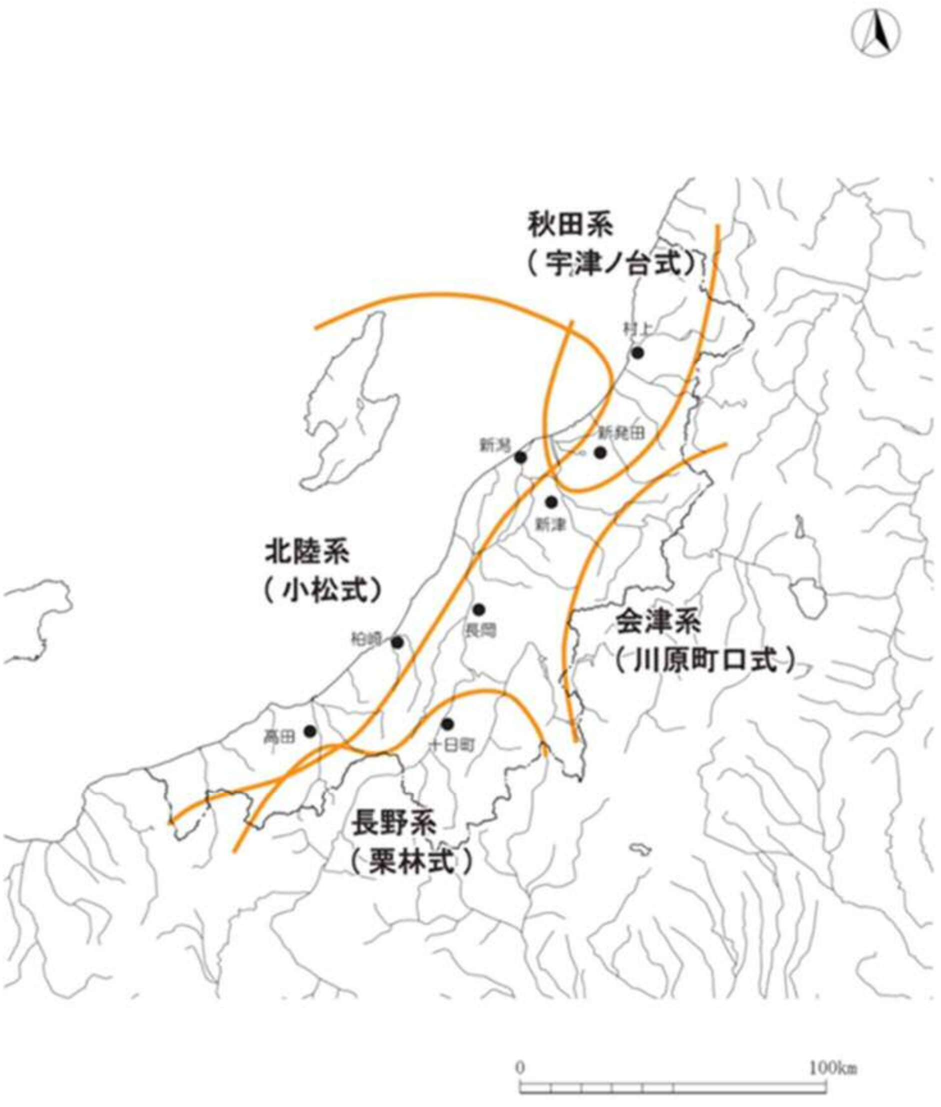
会　場：新潟市文化財センター（展示会場とは異なります）

定　員：80名（無料）　　申込み：不要（直接、新潟市文化財センターへお越しください）

展示解説（新潟市文化財センター学芸員による）

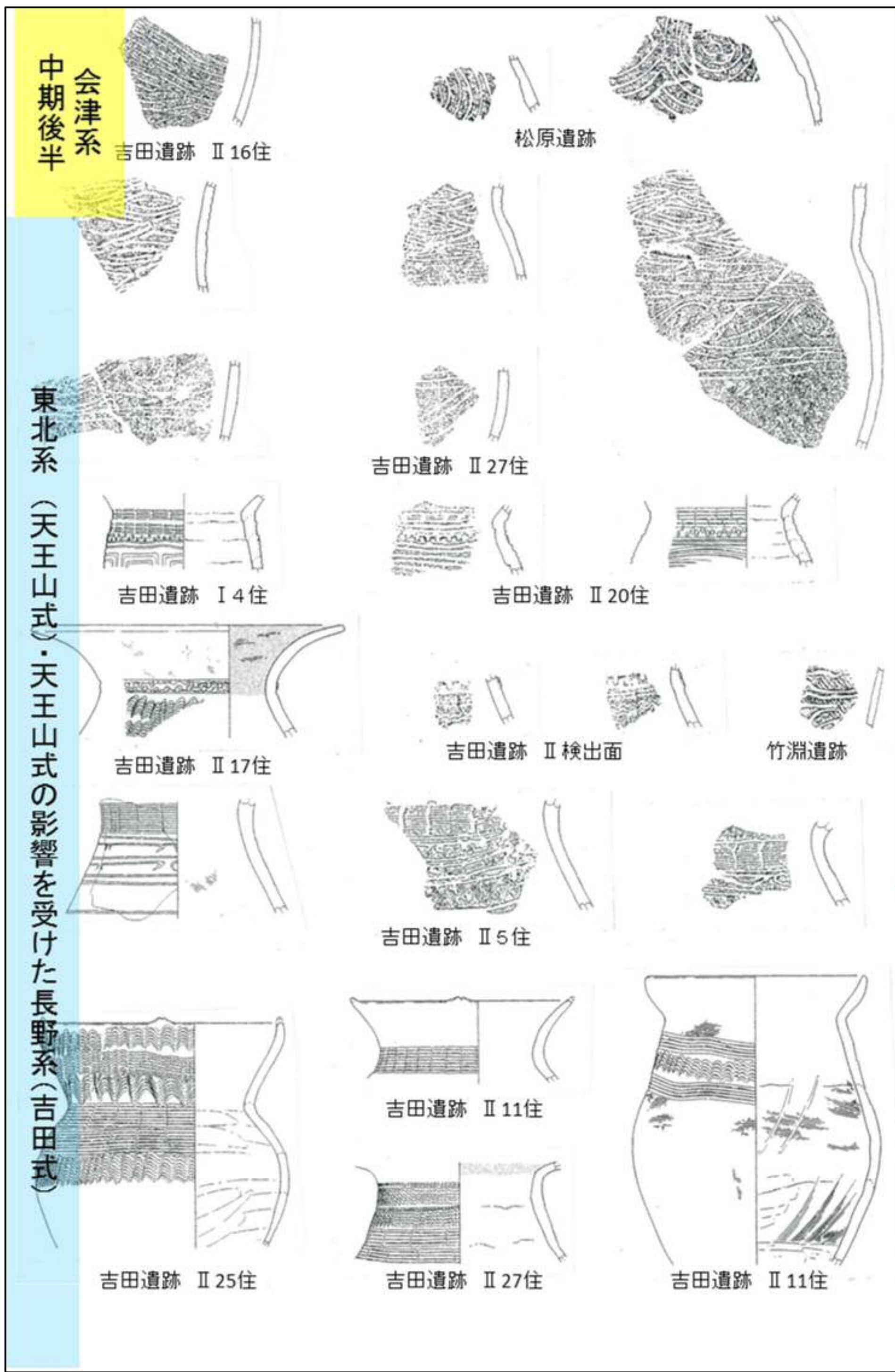
日　時：2018年2月4日（日）13：30～15：30

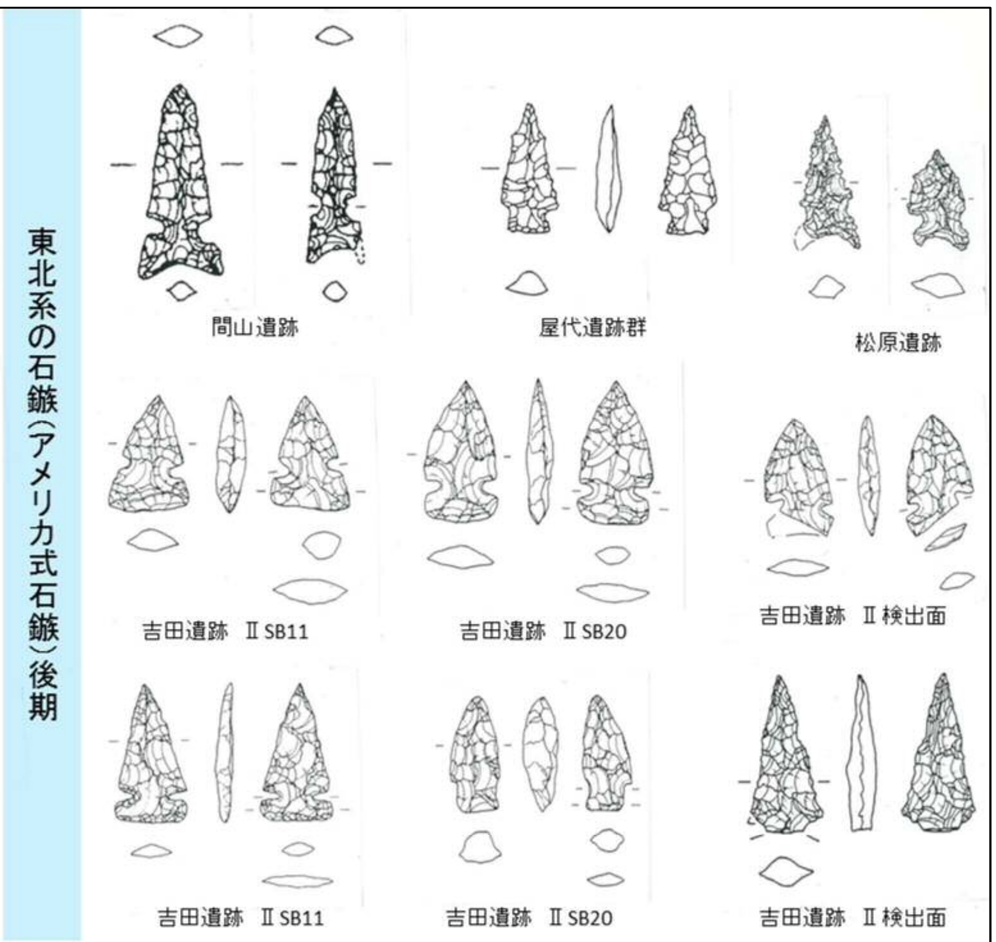
申込み：不要（直接、弥生の丘展示館へお越しください）



弥生時代中期後半の土器別分布

弥生時代後期前半の土器別分布





長野県出土の東北系土器・石器

吉田遺跡（吉田高校グランド遺跡）は後期前半の吉田式土器の標識遺跡。吉田式と天王山式の折衷土器が多い。交互刺突文・口縁部の突起などがある。

高田平野以上に、東北系土器・石器が出土しているが、新潟県魚沼地域でも天王山式が多く出土しているので、魚沼地域から信濃川を介してもたらされたものと考えられる。

2018 年 1 月 4 日発行　新潟市文化財センター